

<翻訳> モーダル的な価値と発話操作^{原注*訳注*}

アントワーヌ・キュリオリ（奥田智樹訳）

私に取り扱おうと思っている問題は、*bien*「よく」と*fort bien*「たいへんよく」のいくつかの用法に関するものである。観察は行いやすく、全体として見れば、フランス語を常用する全ての話し手によって完全に理解可能である。*Littré*や*TLF*や*Robert*や*Lexis*や*Grand Larousse de la langue française*に見られるような*(fort) bien*の価値の記述は、整理の仕方や完全さの度合いに幅が見られるが、大筋においては受け入れられる。そのため、こうした好都合な条件が、言語学者に提起される二重の問題の範囲を定めてくれる。*(fort) bien*の用法について、*il chante bien*「彼は上手に歌う」に見られる副詞*bien*と*il chante bien, lui...!*「彼はちゃんと歌う、彼に関して言えば!>彼はちゃんと歌えるじゃないか!」に見られる*bien*の用法-この例だけを取り上げるにしても-との関係を説明し得るような分析を示せるだろうか。*(fort) bien*の価値を、*(fort) bien*がマーカーとなるような基本的な操作に帰着させることは可能だろうか。

この二重の問題に答えるために、我々は論証されたアプローチ、要するに、個々のメタ言語的な術語が明確にされて理論的な位置づけを持たなければならない、個々の推論の段階が安定した一貫性の規則に従わなければならないような推論の方法を採用することにする。このようにして、当たり障りのないように見える一連の例を通して、論理学と言語学の関係が提起する問題の1つが取り上げられることになるだろう。言語というこの2次的な表現の体系を説明し得るようなメタ言語的な表現の体系をどのように構築したらよいのだろうか。言い換えれば、どのような概念やどのような計算の方法を構築しなければならないのだろうか。場合によっては、言語現象を満足のゆく形で表現するために、どのような論理数学の道具立てを作り上げなければならないのだろうか。

(1) *On achève bien les chevaux!*「我々は馬を完全に終わらせてしまえる>我々は馬にとどめを刺すのだ!」という最初の発話文を考えてみよう。そして、そこから引き出すことの出来る注釈を探してみよう。(特に映画を見ていれば^{原注!})容易に思いつくのは«*Alors, pourquoi pas les humains?*»「それなら人間を殺したって構わないだろう」«*Puisqu'on achève les chevaux, pourquoi (n'achève(r)ait)-on pas les humains?*»「馬を殺すのだから、人間も殺したって構わないだろう」といったものである。このようにして、発話文(1)は2つの項の間関係を確立しているのだ。その項の1つは発話文(1)自体であり、もう1つは(明示的に述べられているにせよ、いないにせよ)そこから派生される隣接した発話文である。この関係は、我々が「構成的指標」*repère constitutif*と呼び e_1 と記される項(«*puisque on achève les chevaux*»)を起点として構築されることが分かる。我々

^{訳注*} 本論文の出典は次の通りである。

Culioli, A. (1990, Pub. Orig. 1978) « Valeurs modales et opérations énonciatives », *Pour une linguistique de l'énonciation, Opérations et représentations*, Tome 1, pp.135-156, Ophrys.

また、本訳注の作成において下記の文献を参照し、多くの情報を得た。

Grossier, M.L. et C. Rivière (1998) *Les Mots de la linguistique, Lexique de linguistique énonciative*, Ophrys.

はその項との関連において、 e_1 から導き出される発話文 e_2 (« *alors pourquoi pas les humains* »)を構築するのである^{原注2}。

ここで我々にとって関心があると思われるのは、 e_1 から e_2 を導き出す言語操作であって、論証活動のイデオロギー的な含意ではないだろう。こうした類の構築においては常に言えることだが、基本的な指標が(その位置づけの起源が経験的なものであろうと、文化的なものであろうと、その他であらうと)理にかなった議論の余地のないものと想定されていることは明らかである。要するに、推論は正規のものと想定されているのだ。しかし、*bien* によって、私が注釈で表したこの発話上の追加要素を構築することが出来るようになるのはなぜなのだろうか。

我々は、上掲のものと類似はしているが文化的な決まり事への従属の度合いが少ない第2の例を取り上げて、ここで我々の分析を完全なものにする必要がある。(2) *Tu lis bien des romans policiers, toi!* 「君だってちゃんと推理小説を読むんだ」という例があるとしよう。もし私が、(あらゆる文脈上の制約がないと仮定して) e_1 から派生される発話文 e_2 を構築しようとするなら、 e_2' « *je peux en lire moi aussi!* » 「(だったら)僕がそれを読んだってよいよね?」や e_2'' « *pourquoi n'aurais-je pas le droit d'en écrire?* » 「なぜ僕にそれを書く権利がないのだろうか? だったら僕にもそういうものを書く権利くらいあるだろう?」や e_2''' « *pourquoi ne lirais-je pas des illustrés, des romans d'amour?* » 「なぜ僕が絵入り雑誌や恋愛小説を読まないのだろうか? 僕がそういったものを読んだっていいだろう?」や e_2'''' « *pourquoi ne jouerais-je pas aux cartes?* » 「僕がトランプをしたっていいだろう?」、« *pourquoi n'aurais-je pas le droit de pêcher à la ligne?* » 「僕にも釣りをする権利くらいあるだろう」のような発話文の集合が得られることが分かる。次に、私は1人称の代わりに3人称を用いた発話文も派生させられるかもしれない。(例えば、« *il peut en lire lui aussi* » 「彼も読んだっていいんだよ」など) もし必要ならば、他の時制を用いても全く差し支えない。(このようにして、« *pourquoi n'ai-je pas eu le droit d'en lire moi aussi?* » 「僕にだってそれを読む権利はあったはずだ」が得られる。) 私が、発話文を生成させる体系を起点として、等価な形式の集合を構築しようとしていることは明らかである^{原注3}。我々が発話文を生成される体系を誘導するものをレクシス *lexis*^{訳注1} と呼び、変調された生起の集合として定義することの出来る発話文の集合を言い替え群 *famille paraphrastique* と呼んでいることは知られている^{訳注2}。

こうして、 e_1 を起点として、言語学者は発話文 e_1 を派生するレクシスを再構築するよう促される。このレクシスは我々にひとまとまりの関係を提供し、それぞれの場所について概念領域を提供する。こうして、図式的には、*tu* 「君」を *a* という文字で示し、*romans policiers* 「推理小説」を *b* という文字で示し、*lire* 「読む」を *r* という文字で示すとすれば、*a, rb* や *ar, b* や *arb* といった関

^{訳注1} 発話操作理論において、「レクシス」の図式とは、 $\langle \xi_0, \xi_1, \pi \rangle$ という形式を持つ3つの概念の組み合わせを指す。この図式は、述語の項となり得る2つの語—すなわち第1の項 ξ_0 と第2の項 ξ_1 —の場所と、述語となり得る語 π の場所を含むものである。

^{訳注2} 発話操作理論において、レクシスの図式は「言い換え群」と呼ばれる、言い換え可能な関係にある発話群の生成をもたらす。ただし、同じレクシスの図式から生成される発話であっても、すべてが同等なものとは見なせるわけではない。

係が得られることは明らかである^{訳注3}。もし、今、*a* が生起(すなわち、*moi* 「私」、*lui* 「彼」、*eux* 「彼ら」など)の1つであるような領域と、*b* が生起(すなわち、*illustrés* 「絵入り雑誌」、*romans d'amour* 「恋愛小説」など)の1つであるような領域と、*r* が1つの生起(すなわち *lire* 「読む」、*écrire* 「書く」および *jouer aux cartes* 「トランプをする」、*pêcher à la ligne* 「釣りをする」、*pêcher la truite* 「マスを釣る」など)であるような領域を構築するとすれば、*bien* がマーカとなる操作によってレクシスから派生される言い替え群を構築できることが予見できる。

次に介入するのは、発話における限定^{訳注4}(文脈、経験的な状況、論証に基づくあらかじめ構築されたもの、など)である。これらは生起^{訳注5}の上の走査 *parcours*^{訳注6}を制限し(したがって、*on achève bien les chevaux* 「我々は馬を殺すのだ」から、「何もかも」派生させられるわけではない)、たいいていの場合には、唯一の発話文の選択に至るのである。

要約すると、*bien* は、(1)や(2)のような発話文においては、この発話文からレクシスを再構築し、そこから生起の集合を派生させることを示している。この集合について走査を行って、派生される発話文 e_2 に至るのである。すでに難儀な論述を重苦しくしないように、我々は、

$e_1(\textit{bien}) \rightarrow \lambda \rightarrow e_2$ (ここで λ はレクシスを示す)

と *puisque e_1, pourquoi pas e_2* 「 e_1 なのだから、 e_2 でないわけがない」

の間の形式上の等価性を論証することはしないが、こうした論証は克服出来ないほどの困難を呈するわけではない^{原注4}。

従って、この第1の分析の最後に、*bien* は、(1)生起 e_1 を起点とする等価な生起の集合の構築、(2)その集合の上の走査、(3)走査の終わりにおける、 e_1 の近傍に属すると想定されている⁶第2の生起 e_2 の選択^{原注5}、を一体化する結合子 *connecteur* であることが確認される^{原注6}。

我々が今、以上の事柄をより厳密に提示しようとするならば、ここで(ρ という文字で表される)概念範疇を取り扱わなければならない。

概念範疇というのは、表現の複合的な体系であって^{原注7}、それぞれが位相を備えた領域 *domaines* の上に構築される。領域は、(α)物理文化的な特性の構造化された集合や、あるいは(β)文法的な概念の網や、あるいは(γ)(α)の類の概念間の関係の網によって構築されることが可能である^{訳注7}。

^{訳注3} この *r* という文字は、*relation* (関係)に由来している。

^{訳注4} 発話操作理論における「限定」とは、絶対的な普遍性と絶対的な個別を両極端とする、指示に関する普遍性 / 個別性の程度を含むものである。例えば、*life* という概念について言えば、「*a matter of life and death* (生死の問題)」という場合にはその最も低い程度が表現されており、逆に「*I would't object sparing the life of this tiny snail if it wasn't eating may marigolds to shreds* (この小さなカタツムリが、私のマリーゴールドをずたずたになるまで食べていたのでなければ、私はその命を助けてやることに反対しない)」のように、*life* が個別的な単一の出現を指し示す場合には、その最も強い程度が表現されている。

^{訳注5} 「生起」とは①発話における言語要素の存在、②発話行為における概念の表明であり、もっとも単純なケースで言えば問題となっている概念を指し示す語によって表現されるもの、③ある事行が、ある時点、状況において起こりつつあるもの、あるいは起こるべきものとして提示されること、の3つの異なる意味を持つ。この場合には、この3番目の意味で用いられている。

^{訳注6} 「走査」とは、ある集合や概念領域上における限定の操作であり、発話者がそのすべての要素を次々に検討していく作業を指す。

^{訳注7} キュリオリはトポロジ的な概念を用いて、概念の範囲限定に必要な構造化の操作を表示した。すべ

(α)の類の概念は内包的に定義され、述語の性格を持つ^{原注8}。限定のつなぎ合わされた一続きの操作によって、 \mathcal{P} から、定量的 *quantifiable* / 定性的 *qualifiable* なものとなる構築された言語対象が生み出される。なお、これらの限定の操作は、抽出 *extraction* と照準設定 *fléchage* と走査である。これらの操作が述部の関係を構築することを可能にし、その関係が、発話状況に対する様々な位置づけ *repérage* 操作の後で、発話文に至るのである。つまり、互いに結び付いた述部の概念 *notions prédicatives* から発話に移行するのである。要するに、述語となり得るものを出発点として、発話文を提供する、発話し得る関係を構築するのだ。

網羅的でない方法で、概念範疇を構築する領域のいくつかを数え上げてみよう。そして、そうするために、生起の集合が何であるか定義することから始めよう^{原注9}。概念範疇 \mathcal{P} が与えられると、領域に応じて特性 p が区別される。(いくつかの特別な例を挙げるにとどめるにしても、意味論では、例えば /être chien/ 「犬であること」、/être liquide/ 「液体であること」、/lire/ 「読むこと」、(«lire + lecture + etc.» 「読むこと+読書+その他」)^{原注10}。文法的な概念では、例えば、アスペクト性、モーダル性、量性 *quantitative* / 質性 *qualitative*、あるいは、内包性 *intensité* あるいは外延性 *extensité* の程度の評価(到達 *achèvement*)などがそれにあたる。)

その際に、下位領域 p の生起 p_i, p_j の集合が構築される。 p の全ての生起 p_i は、構築のされ方によって近傍を持ち、従って、 p には他の生起 p_j が存在する。従って、 p は開集合 *ouvert* によって表現され得ることが分かる。

このとき、この開集合の補集合 C_p ^{原注8} が構築される。 C_p は定義によって閉集合 *fermé* となる。(従って、 C_p の境界と内部を含む。)我々はこのときに C_p の内部の閉集合を構築するのである。(というのも、我々は p の、数学的な補集合を構築しようとしているのではなく、この補集合のある一何でもよいわけではない一部分を構築しようとしているからである。)本来から逸脱した言葉遣いになるが、我々はこの部分を概念的補集合(あるいは、言語学的補集合)と呼び、印刷上の便宜によって、この部分を p' で表すことにする。 p' は、大まかに言えば、先に示した通り、数学的な補集合 C_p から構築される内部の境界と定義される。我々は、概念 \mathcal{P} から派生される位相空間を (p, p') と記すことにする。発話操作に応じて、密着位相 *topologie grossière* が得られる。(例えば、 (\mathcal{P}, \emptyset) 、すなわち「それがそうであるか、ないか」で捉えられる指示や、言い逃れや「知らない」という答えや修辞疑問文などを除外した、厳密にはいい／いいえで答える質問に見られる。)アスペクト領域においては、より強い離散位相 *topologie discrète* を問題にすることになる。たいていの場合、そこに距離位相 *topologie métrique* (初出年代決定 *datations* など)を加えなければならなくなる。しかし、根本的には、メタ言語的な構築は、上に記述されたようなものになるだろう。^{原注9}

ての概念は「概念領域」として構築され、概念領域は内部 p と外部 *non-p* と内部と外部を分離する境界を含んでいる。

^{原注8} キュリオリの概念領域としての概念のトポロジ的な表現においては、(開集合としての、すなわち境界を含まない)集合 p の真の内部は、原則として、 p ではない部分である外部と境界(すなわち、閉集合としての外部)とを「(言語的な)補集合」として持つ。本文中に述べられている通り、補集合は p' という記号で表される。

^{原注9} このあたりの記述は難解を極める。あえて解説を試みれば、次のようにならうか。数学の位相空間論において、密着空間とは、直観的にはその空間のすべての点が「ひとかたまりに密着」していて、どの点も

我々はここで、読者がうんざりしたりせず、これらの形式的な考察が、発話主体—話し手や、言語というその具体的な痕跡についての読者のエピソード的 épilinguistique^{訳注 10} 直観に見かけよりも近いものだということを理解してもらえるように、いくつかの例を示すことにする。

I 「彼女は地域の人たちのために縫い物をしているんだ。」

「君はあれを縫い物というのか。縫い物としては、失敗作の部類だよ。いいかい、彼女には才能はあったけれど、いつもためらっているばかりで、意を決して本当に縫い物を習おうとは全く思わなかったんだ。ただ布の三つの端を縫い合わせるだけではなく、本当に縫い物と呼べるものをね。」

II 「彼はいつも不満ばかり言っているんだ。」

「ああ、僕は彼がそれほど不満を言っているとは思わないよ。むしろわめいていると言いたいね。」

III 「女子体操の選手権試合を見たかい？」

「僕は、あれはもうほとんど体操じゃないと思うよ。床運動は別としても、あれは正確にはダンスじゃない。ダンスに少しずつ近づいてはいるけれど、まだ到達はしていないね。ダンスともダンスでないとも言えないよ。」

IV 「彼はいつも本ばかり読んでいるんだ。」

「ああ、読んでいると言えば読んでいるのかな。きちんと読んではいないみたいだよ。ざっと目を通してただけさ。」

V 「もう宿題は終わったの？」

「ほとんど終わったも同然だよ。」

VI 「仕事は始めたの？」

「鋭意熟慮中だよ。始めようとしたのだけれど、まだ本腰が入っていないんだ。でも君も知っているように、僕がひとたび始めたら、もう終わったも同然さ。」

VII 「おや、見たかい。鳥が飛び立って行ったよ。」

「どんな鳥かな。」

「ええっと、鳥だよ。鳥は鳥だよ。どっちみち、一羽しかいないよ」

「いや、僕が言いたいのは、そんな鳥がいたのかってことさ。君はどこで鳥を見たの。僕は何も見えなかったよ。」

位相的な意味で区別できないような位相空間である。それに対して、離散空間とは、その点がすべてある意味で互いに「孤立」しているような位相空間である。密着空間においては、任意の2点間の距離は事実上ゼロと見なすことが出来る。言語学に転じて考えれば、 (P, \emptyset) で表されるような、補集合が空集合になる概念 P の場合がその典型である。一方、離散空間においては、その空間内の点がどのように離散しているかが明確になっていない。言語学に転じて考えれば、それを明確にするために、任意の二点間の距離を、例えばここで述べられている「初出年代決定」という形で決定しなければならない。

^{訳注 10} メッセージが発話される前の段階を問題にして、この段階において話し手が無自覚的、無意識的に構築する、そのメッセージの形式を決定づける脳内言語のことを「エピソード」と呼ぶ。それに対して、メッセージが発話された後の段階を問題にし、特定のメッセージの観察を通じて、それを成立させている言語を記述、分析する際に用いられる記述用言語のことを「メタ言語」と呼ぶ。

VIII 「どうせ死ぬなら、太いハバナ葉巻を吸いながら死にたい^{原注 11}。」

それでは、これまでの部分で明らかになった操作に帰着させることの出来ない、*bien* の他の価値が存在するかどうか確かめてみよう。そのために、(3) *Il a bien expédié une lettre* 「彼は確かに手紙を送った」という発話文とその解釈を考えてみよう。

(3a) 「彼は手紙を送ったのだ。私だってそうするさ。」など

(3b) 「可能な行動や試みの中で、彼は手紙を送ることを選んだ。しかし、それがうまくいくだろうか。／しかし、それは何ももたらさなかった。」

(3c) 「彼は実際に手紙を送った。」例えば、質問に対する答えの場合である。

(3a)の解釈は、前のページで分析を行った。(3b)の解釈においては、通常の印刷上の慣例では、中断符によって発話文のやや覚めた性格が示されるところだが、与えられた発話領域について、想定し得て、従って発話し得る事行 e_i, e_j (*téléphoner* 「電話する」、*protester* 「抗議する」、*expédier une lettre* 「手紙を出す」など)の集合が構築される。このようにして *bien* は、(1)この可能な価値の集合の構築、(2)その集合の走査、(3)その終わりにおけるある価値の選択、を示すのである。平凡な(3c)の解釈について言えば、この解釈は(明示的にせよそうでないにせよ)あらかじめ構築されているものと発話文 e_2 の間の(確認の)関係を示している。従って、次を得る。

(3a)においては $\underline{e}_1 \rightarrow \lambda_0 \rightarrow e_2$

(3b)においては $(e_i, e_j, e_k)_1 \rightarrow \underline{e}_2$

(3c)においては $e_1 \rightarrow \underline{e}_2$

ここにおいて、二重下線は *bien* というマーカを含む発話文(テキスト的な要素連続)を示す。

これら 3 つの図式が、どういった部分でただ 1 つの基本的な(複合的な)操作に帰着するのかが容易に理解出来る。異なっているのは、操作が及ぶ構築された領域である。(3a)においては、構築された領域は、(e_1 から再構築される) λ_0 から派生される生起 λ_i, λ_j の集合である。(3b)においては、照準を合わせられた目標 *visé* に到達するために、能動的な生起 c_i, c_j の集合が構築される^{原注 12}。(3c)においては、あらかじめ構築されたものが走査される領域を形成する。(3a)や(3b)におけるように、厳密な意味で生起の集合が得られる場合には、この集合で走査が行われる。(3c)におけるように、集合があらかじめ構築されたものだけに限られる場合には、走査は同一化 *identification* に帰着する。従って、何故(3c)は確認の価値を生じさせるのに、それに対して(3b)は注に記述されているような価値を持つのが理解される。(3a)について言えば、我々は何故これが *puisque (...), alors pourquoi pas (...)* 「…なのだから、…でないわけがない」と等価になるのかを、上に図式的に示した。

最後の点が残されているが、これについては触れるだけにとどめよう。*bien* は(そもそも *beau* がそうであるように)質的に肯定的な単語なので、見かけよりも複雑な操作のマーカである。一方では、領域を構築し、そこに/*bien*/と存在や所有物や範囲を限定された現実とのよく知られた関係を象徴的な形態で見出す^{原注 13}。第 2 に、生起の集合を走査するが、それは「反復」*itération* に帰着し、それから関係を確立する。この最後の 2 つの場合においても、*bien* の肯定的な性格と反

復または断定の関係付けとの間に存在する結びつきを再び示すことが出来る。

この全てのことによって、何故 *bien* が否定と共起し得ないのか、最小値を起点とする概数を表し得るのか (*Il a bien la cinquantaine* 「彼は少なくとも 50 歳前後だ」 (= 50 歳前後かそれ以上だ))、何故断定 (*tu penses bien* 「君は確かにそう考えている」、*peut-être bien* 「本当にもしかすると」) や二者択一 (*ou bien... ou bien* 「…かさもなければ」) を区切って強調するのか、何故譲歩 (*bien que* 「にもかかわらず」) や数量 (*bien des gens* 「多くの人」) や強度 (*bien aimable* 「非常に親切な」) を示すのか、がよりよく見えてくる。

以下に示すのは、大まかに言えば同じ操作を含んでいるが、分析を精緻なものにしてくれる、直説法現在または複合過去の他のいくつかの例である。(4) *Il a bien essayé de parler au chef du personnel* 「彼は確かに人事部長に話をしようとした」 — この例の曖昧性はこれまでに述べた全てのことから容易に説明される — の他に、(5) *Il y a bien Jacques* 「本当にジャックがいる」も、走査の操作がどんなものなのかをよりよく理解させてくれる。この発話は、「実際にジャックがいる」という意味を持つこともあれば(関係 $e_1 \rightarrow e_2$)、「(やむを得なければ、)ジャックの名前を挙げることも出来る」(解釈(b)：可能な価値の集合を構築し、この集合を走査し、走査の終わりに一つの価値 — ここではジャック — を選択する) という意味を持つこともある。*C'est bien Jacques* 「それはまさにジャックだ」と比較することも出来よう。この 2 番目の発話においては、同一化の操作を問題にしているので、全ての走査は排除され、解釈(a)も解釈(b)も不可能になる。ただ一つ残るのが解釈(c)、すなわち「それは実際にジャックだ」である。それとは逆に、定位表現 *localisateur* 原注 14 の *Il y a* は曖昧であることを論証することも出来る。(一方では、*Il y a bien Jacques dans telle situation. Pourquoi pas Z?* 「ジャックがこのような状況に置かれているのだ、Z がそうでないわけがない」という解釈があり得る。また他方では、*Dans telle situation, il y a x_i, x_j, x_k* 「このような状況に x_i, x_j, x_k は置かれている」を出発点として、定位される側の表現 *localisé* の場所に割り当てることの出来る価値の集合を構築すれば、解釈(b)が生み出される。最後に、 $e_1 \rightarrow e_2$ の関係も得られ、そこから「実際にジャックがいる」という解釈が生み出される。)

同様に、*Tu as bien dit « Trois »?* 「君は確かに「3」と言ったのか?」や、*C'est bien le train pour Londres?* 「これは本当にロンドン行きの列車なの?」においても、*bien* は $e_1 \rightarrow e_2$ の操作を示している。

以下に示すのはもう少し複雑な例である。(6) *Je le trouve bien un peu mou* 「彼は確かに少し軟弱だと思う」(でもやはり/もしかすると彼を取ることになるだろう)は、「本当を言うと、彼は少し軟弱だと思うのだが…」に非常に近い意味である。(このような場合、譲歩的な価値と言われることが多い。) ここにおいて、*bien* によって示される操作の領域は何だろうか。次の注釈から始めてみよう。「私が何をしても無駄だ、いくらあれこれ考えてみても、彼が少し軟弱だと思うことに変わりはない/私は…であることを認めなければならない」さらに、*Je le trouve très mou* 「私が彼がとても軟弱だと思う」が可能だとしても、反面 **Je le trouve bien très mou* 「私は彼が確かにとても軟弱だと思う」が不可能であることを確認することが出来る 原注 15。

ここで注目すべきなのは、前の例におけるように、集合を構築し 原注 16、その走査を行い、限定

された価値(*déterminé*「限定された」と *défini*「規定された」を混同してはならない)―この場合には *un peu*「少し」―を取り出すということである。もし注釈を示そうとするならば、次のように言えるかもしれない「この人の軟弱さの度合い、つまり *Qt* (*lui*「彼」, *mou*「軟弱な」) について言えば、結局のところ、私は彼が確かに少し軟弱だと思う。」この注釈において、(...) *le* (...) *un peu* 「(…)彼が(…)少し軟弱だと」の部分は *Qt* (*lui*「彼」, *mou*「軟弱な」) を一語一語繰り返しており、*je trouve*「私は思う」の部分、発話者に対する評価の状況的な位置づけ *repérage* を示している。*un peu*「少し」については、肯定的に定量化される *qualifié* ある種の価値を持っていることを示している^{原注17}。もし循環的位置づけ *repérage circulaire* があるとするならば、(*p*, *p'*)という概念は自分自身に対して位置付けされるだろう。そのことは、我々に *Je le trouve bien mou*「私は彼が確かに軟弱だと思う」という発話文を与える。この例における *bien* は、「実際に」と等価ではあり得ず、また *Je le trouve bien un peu mou ... (mais)*「私は彼が確かに少し軟弱だと思う…(けれど)」におけるような譲歩の価値を持つこともあり得ない。*Je le trouve bien mou*「私は彼が確かに軟弱だと思う」という発話文は、断定においては *p* を含んでいる(ここにおいて *p*=/être mou/「軟弱であること」)ので(注16参照)、そのことは、(*p*, *p'*)が与えられているとして、*p_i*という実現された生起があることを意味している。ところで我々は、(*un peu*「少し」のような類の)全ての明示的な限定がない場合には、全ての生起 *p_i*は *p* の中に近傍を持つことを知っている。このことは、実現された生起が開集合 *p* と同一化可能であることを含意している。記述しようと思えば、次のように記述することが出来よう。

$$p_i \subseteq (p, p') \subseteq \text{Sit} \Rightarrow p.$$

このことから、時として「高い程度」と呼ばれるものが導き出される^{原注18 訳注11}。

今度は、未来形のいくつかの例を考えてみよう。

(7) *Il postera bien la lettre un jour ou l'autre.*「彼はとにかくいつかは手紙を投函するだろう」(すなわち「彼は最後には手紙を投函するだろう」)

(8) *J'arriverai bien avant la nuit.*「私はとにかく夜になる前には到着するだろう」(我々は *bien avant*「ずっと前に」という解釈を検討しようとしているのではなく、「私は最後には…到着するだろう」という解釈を扱おうとしている。)

(9) *Il fera bien un geste en ta faveur ...*「彼はいずれは君のために行動を起こすんじゃないかな…」(「まったくもう、少しはその努力をしてくれたっていいのに」)

(10) *Vous prendrez bien un petit quelque chose !*「何かちょっとは食べてくださいよ」

訳注11 *Sit* は発話状況を示す。*ε*(イプシロン)はキュリオリの理論における位置づけの操作を示す記号であり、*aεb* は「*a* は *b* に対して位置付けられる」ことを意味する。このとき、*a* は位置付けられるものとなり、*b* は指標となる。また、「高い程度」とは概念領域の内部を問題にした表現である。発話操作理論では、全ての概念領域の内部は、その構造の中心部との一致の程度によって、生起がグラディエントを成しており、生起が中心部に近ければその程度は高まり、生起が境界に近ければその程度は低くなるとされる。

訳注12 この式の表す内容は概略次の通りである。発話内容となる状況 *Sit₁* が発話状況 *Sit₀* に対して位置付けられるという $\langle \rangle_0$ の関係付けがあり、それと交差する形で、発話を生成するレクシス λ が発話内容となる状況 *Sit₁* に対して位置付けられるという $\langle \rangle_1$ の関係がある。この両者は不可分のものであり、それらを一つの関係付けとして取りまとめているのが $\langle \rangle_2$ の関係である。

これら全ての例において、*bien* は確認($e_1 \rightarrow e_2$ の操作)^{原注19}を示しているのではない。これらの例の分析については、 $e_1 \rightarrow \lambda_0 \rightarrow e_2$ の類の解釈(II ira bien en Espagne, lui ! Pourquoi pas moi ? 「彼だってちゃんとスペインに行くのだ。私だってそうするさ」)や、上で考察した試みの価値(il écrira bien au chef du personnel, mais il n'a pas grand espoir「彼は実際人事部長に手紙を書くだろうが、あまり望みはない」)は除外する。

これらの例の分析によって、生起の集合上の走査という操作の新しい場合を引き出すことが出来るようになる。我々はここで未来形の二つの特性を思い出さなければならない。(1) 未来形は「照準」*visée*を含意する。それが意味するのは、発話の指標 Sit_0 から、まだ検証されて *validé* いない述部の関係 λ_i に照準を合わせる *viser* ということである。述部の関係はまだ定位されて *situé*(発話的に位置づけられて *repéré*)いないので、この関係は (p, p') の特性を持つ発話し得るもの(概念的な構築物)である。 λ_i に照準を合わせるということは、発話者が考えを定めるために、 (p, p') の一方の価値である p を区別することを意味する。彼は、 T_i において述部の関係が検証されるだろうということを述べ、考え、期待し、望み、命じ、恐れ、予測し、などなどといったことを行う。こうして、 $T_1 = \mathcal{A}$ において (p, p') を有し、 T_i における p に照準を合わせるということになる。我々は照準を (p/p') と記すが、この斜めの棒線は、 (p, p') において p に照準を合わせることは、必ずしも p の実現を意味するわけではないことを示している。従って、モーダル的な観点から見れば、我々は「不確実」*non-certain* の領域にいるのである。なぜなら、「確実」*certain* は確率 1 によって特徴付けられるからである。その結果、「過去」*révolu* と「現在」*actuel* のみが「確実」の領域に属することになる^{原注20}。(2) 未来形はアオリスティック *aoristique* である。図式的に述べれば、そのことは、照準の発話($T_1 = \mathcal{A}$)と発話を媒介として照準を合わせられるその検証(T_i)の間に断絶 *rupture* があることを意味している。それとは独立した推論によって、述部の関係は p, p' から p に移行するときに検証されることを示すことが出来る。このことは、少なくとも 2 つの位相—一方は \mathcal{P} 上のもの、もう一方は $\mathcal{J} \neq T$ 上のもの—から構成される有界閉区間によって表し得る^{原注21}。

bien は $\langle \text{lui poster la lettre}$ 「彼(女)に手紙を投函する」 \rangle という述部の関係において \mathcal{P} から派生される(位相)空間 (p, p') 上のこの走査を、とりわけ明快に示す。我々は、 $Sit_i - \langle \text{lui poster la lettre}$ 「彼(女)に手紙を投函する」 \rangle の(照準を合わせられた)指標—におけるパラメータ T_i の価値については何も分かっておらず、そのことによって *un jour ou l'autre* 「いつかは」が付け加わっている。同様に、*il finira ...* 「彼は最後には…」という注釈は、実際に走査の終わりにおいて境界が越えられることを明確に示している^{原注22}。

例(8)は、同様に、私が夜になる前に到着する可能性に関する予測が問題になっていることを示している。私は $(p, p') \rightarrow p$ の移行の確率の集合を構築し、その集合を走査し、そこから「私は夜になる前にうまく到着出来るはずだ」を導き出す。

例(9)においては、構築される生起の集合は同様に確率の集合である。*quand même* 「まったくもう」は、走査という操作の痕跡であるから、自然に付け加えられた表現である。というのも、例(8)においては、可能性の集合は肯定的な側面を持っているが、それに対して(9)においては、頭の

中で様々な障害物(否定的な側面)を走査しており、そのことが譲歩の *quand même* の出現を説明する。

例(10)についても、同じ手法によるものである。他人に対して、最小量(最低限度への調整)であっても食べるように催促し、その人に快諾してくれるようお願いしている。発話は能動的な力(「私はあなたに食べさせようとしている」)を持っており、その力は照準(p/p')に結び付いた述部の関係の検証の可能な生起の開集合における走査に関係付けられている^{原注 23}。そのことから、しつこい勧誘を相手にしているという気持ちになる。

次に示すのは、類似の価値を持つ2つの他の例である。

(11) *Tu achèteras bien un de ces souvenirs horribles, genre Tour Eiffel ! Les marchands sont si forts...* 「君はあのひどいお土産の一つを買うことになるだろうよ。エッフェル塔の類さ。店の人たちはものすごいから…」(「予想」君が何をしても無駄だ、君は最後には…)

(12) *Tu achèteras bien un petit souvenir, non ? Juste pour le geste.* 「小さなお土産を一つ買ったらどう。体裁だけでいいからさ」(「懇願」あまり気乗りがしなくても、そういう努力をしてよ。死にはしないから)

条件法に移ろう。そうすると次の文が得られる。

(13) *Tu achèterais bien un de ces souvenirs horribles, genre Tour Eiffel, les marchands sont si forts.* 「君はあのひどいお土産の一つを買うだろうに。エッフェル塔の類さ。店の人たちはものすごいから…」

しかし、この発話は、例えば *si tu avais l'occasion de visiter un marché, tu achèterais bien (...)* 「もし君が市場を見物する機会があれば、…買うだろうに」のような前提節を付け加えなければ、奇妙であり、形が整っていないとさえ言える。このことは、上で検討した *bien* の価値に我々を立ち返らせる。

次に掲げるのは、同様に容認し難いもう一つの例である。 *tu boirais bien un verre de bière* 「君はコップ1杯のビールを飲むだろうに」何故、条件法の2人称単数+*bien* という連続は容認し難いのだろうか。

最初に、この例は、代名詞に関する補足的な操作、

(14) *Toi, tu boirais bien un verre de bière.* 「君ならば、コップ1杯のビールを飲むだろうに」
あるいは、あらかじめ構築された述部の関係に関する操作(懇願を表す疑問)

(15) *Tu boirais bien un verre de bière, non ?* 「コップ1杯のビールを飲むんじゃないのか」
を加えると、再び容認可能になることに注目しよう。

さらに、これらの現象を、主観的な述語において観察される事実と比べてみよう^{原注 24}。 *Tu as mal au cœur* 「君は胸がむかつく」は(医師が自分の患者の推測される症状を病人自身に説明する場合には、医師の口に上る場合を除いて)奇妙だが、 *toi, tu as mal au cœur* 「君は胸がむかっているんだね」や *est-ce que tu as mal au cœur ?* 「君は胸がむかっているの？」は問題がない。

こうした事実をどのように説明したらよいだろうか。未来形においては、発話の位置付け *repérage énonciatif* は $Sit_0 (S_0, T_0)$ と同一の $Sit_1 (S_1, T_1)$ から行われる^{原注 25}。要するに、話し手 *locuteur*

$S_1 = \mathcal{S}_0$ は発話者 *énonciateur* \mathcal{S}_0 と一致しており、対話者 *interlocuteur*とは異なっている^{原注26}。変調(滑稽な予言、懇願、覚めた運命論など)を度外視したところで、*bien*は閉区間の境界に到達するまでの開区間の走査を示す。(この点については、日常的なメタファーが多くを語ってくれる。*en fin de compte*「結局」、*tu finiras par*「君は最後に…するだろう」、*tu peux quand même aller jusqu'à*「それでも君は…してしまうかもしれない」など)条件法においては、状況は根底から異なっている。

条件法は、 Sit_0 を起点として、架空の原点となる指標 *repère-origine fictif* Sit_0^1 を構築することを示し、その指標から述部の関係に照準を合わせるのである。この架空の指標から、架空の照準合わせが行われる。このことが意味するのは、 Sit_0^1 を構築しながら、 \mathcal{S}_0 は述部の関係が検証可能であると想定しているが、この関係がある何らかの $Sit_i (T_i)$ —その $Sit_i (T_i)$ が何であろうと—において必ず検証されるとか、あるいは(選言的な意味で)検証されないとかいうことを含意しているわけではない、ということである。このようにして、 Sit_0^1 から発する空間において、対立する考えが $\mathcal{S}_0(\mathcal{S}_0')$ に変化している)の意のままに保留された状態になっている。発話者は想定し得るものを全て想像し、検証されていないものに照準を合わせながら同時にその照準を合わせられたものを断定することが出来る。それが行われるのは、遊びのとき(「君が憲兵になって、僕が泥棒になることにしよう。’)や、仮定のとき(「彼がここにいたら、君は違った行動をするだろう。’)—この例ではアオリスティックが *lui être ici*「彼がここにいる」を検証する $Sit_i (T_i) = Sit_0^1 (\mathcal{S}_0')$ (架空の)存在に述語付与する—や、願い—実現を阻まれる場合もそうでない場合も、他人の目から見て実現可能な場合もそうでない場合も—(*je m'achèterais bien un caméra*「私はカメラが買いたいのだが」、*lui déménagerait, mais sa femme ne veut pas*「彼は引っ越したがっているが、妻はそれを望んでいない」)のときや、計画された可能性(*Jacques resterait à la ferme et sa femme travaillerait en ville*「ジャックは農場に残り、妻は町で働くだろう」)のときである。*si j'avais le temps, j'irais au cinéma*「もし私に時間があれば、映画に行くのだが」における条件法も、同様にそこから生じるものである^{原注27}。

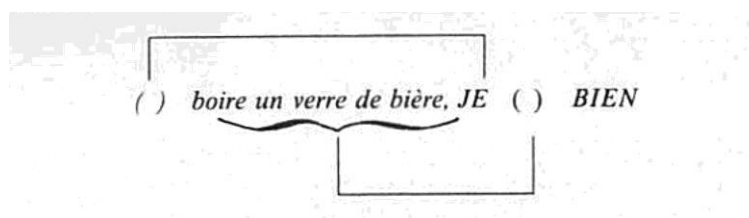
従って、もし *bien* を取り去ってしまうと、*je / tu / il boirais(t) un verre de bière*「私は／君は／彼はコップ1杯のビールを飲むだろう」が容認可能になるのは、想定されている事行のアオリスティックな連続の中にある場合 *tu entrerais dans la pièce, tu boirais un verre de bière, (...)*「君は部屋に入るだろう、君はコップ1杯のビールを飲むだろう、(…)」か、または架空の発話者に結び付けられる場合(*dit-on*「…ということだ」や *paraît-il*「…そうだ」の類の価値)：*Paul prendrait le train de 5 h*「ポールは5時の列車に乗るそうだ」*Tu as entendu la dernière ? Je / Tu épouserai Pierrette !*「最新のネタを聞いたかい。僕／君がピエレットと結婚するんだって」のみになるのは何故なのかが容易に理解できる。これらが、報道調と呼ばれる条件法のもとになっている。こうした条件法は、非公式のため疑わしく、そういうものとして示したいと思っている情報を掲げることを可能にしている。

それに関連して、(16) *Marie épousera Paul*「マリーはポールと結婚するだろう」と(17) *Marie épouserait Paul*「マリーはポールと結婚するそうだ」を比較してみよう。

(16)では、その他にマーカーが何もなければ、発話者と話し手は一致しており、関係に照準が合

わされている、すなわち関係はまだ実現はしていないが、実現するはずのものとして示されている。従って、主観的な確信を持っており、モダリティは「不確実」/non-certaine/である。(17)では、架空の指標が構築され、そのことによって発話者と話し手(あるいは書き手)を分離することが可能になる。照準 *visée* はこの架空の指標から行われ、そのため「現在」*actuel* と「将来」*avenir* に関わっている。(*X serait en ce moment à Londres* 「X は現在ロンドンにいるそうだ」と *X serait à Londres dans une semaine* 「X は1週間後にロンドンにいるそうだ」はいずれも正しい文であるのに対して、**X sera en ce moment à Londres* 「X は現在ロンドンにいるだろう」は非文であるが *X sera à Londres dans une semaine* 「X は1週間後にロンドンにいるだろう」は正しい文である。) そのことによって、自分の述べることに責任を負わずに述べる事が可能になる。

bien を挿入するとどうなるだろうか。我々は、条件法に伴う *bien* の用法のみを考察するために、未来形の発話文における *bien* の価値を再び持ち出すことはしないことにする^{原注28}。1人称という特別な場合においては、*bien* は次のような類の内的な繰り返しの操作を示す。



(例えば、*est-ce que tu veux/voudrais boire?* 「飲みますか?」に対して、**je veux/voudrais* 「いただきます」は非文で、*je veux/voudrais bien* としなければならない。) この条件法+*bien* という結び付きによって示されるのは、主語が架空の照準の空間にあるということであり、その空間においては、発話するとは、願いというものの性質上、発話者—話し手の願望にしか依存しないような想像上の存在の述語付与を作り出すことなのである。そのことから「もしそれが私次第ならば、簡単に、喜んで」のような注釈が可能になる。*Je boirais bien un verre de bière* 「コップ1杯のビールが飲みたいのですが」(私は喜んで飲むだろう)、*Je posterai bien la lettre à votre place, mais je ne passe pas là* 「あなたの代わりに手紙を投函したいのはやまやまなのですが、その場所を通らないのです」(もし事情が許せば、私はすっかり乗り気なのですが(…))のような例においても同様である。その結果、この同じ解釈が3人称にも見られることになる。というのも、3人称^{原注29}は $Sit_1(S_1, T_1) \subseteq Sit_0(S_0, \mathcal{S}_0)$ で定義される発話面の外部にあるからである。従って、 S_2 が3人称の発話文の主語を示すとすれば、 $S_2 \omega S_1 \subseteq \mathcal{S}_0$ を得る^{原注30}。今度は S_2 が発話者—話し手としての役割を果たし得ることは、容易に論証することが出来る。そこから、*Jacques boirait bien un verre de bière* についての「ジャックは喜んで飲むそうだ」や「ジャックは喜んで飲むと言った」つまり「ジャックは「僕は…を飲みたい」と言った」のような規則的な解釈が生じる。

2人称では、条件法が示す操作は対話者(Tu)に不安定な位置付けを付与する。というのも、対話者はもはや発話の原点となる指標 \mathcal{S}_0 から計算されるのではなく(Tu は、それ自体で S_1 の \mathcal{S}_0 との同一化を表す *Je* とは異なる)、架空の発話者 \mathcal{S}_0' —この \mathcal{S}_0' に対して架空の発話空間が構成される—から計算されるのである。ところで、上で見たように、この発話空間は弁別的な特質を持ち、

我々は *bien* の存在が発話者－話し手の願いをどのように明らかにするかを分析してきた。 *Tu boirais bien un verre de bière* 「君はコップ 1 杯のビールを飲むだろうに」という発話文は、対話者が話し手の役割を演じており、この発話文を前にして覚える違和感や上記の分析から説明される。この文は話の下手な人によって作り出されたように感じられる。それゆえ、1 人称や 3 人称では、この発話文が何故正しく形成されたものになるかがよりよく理解出来る。 *Tu boirais bien (...)* 「君は飲むだろうに」を位置付けるための指標があらかじめ構築されている場合にも同じことが言える。例えば、 *Si tu avais vraiment soif, tu boirais bien un verre de bière* 「もし君が本当に喉が渴いているのなら、コップ 1 杯のビールを飲むだろうに」(たとえ君がそうしなくても、最後には…)のような場合がそうである。なぜならば、このようにすれば発話文はもう不安定な状態 *en suspens* ではなくなるからである。

しかし、問題になっている操作を明らかにし得るため、より注目すべき手続き *manipulation* が存在する。 *Toi* 「君」というマーカーを付け加えることによって(例 14)、私は相互関係 *jeu* を移動させる。なぜなら、「私は対話者を切り離し、」そのことによって対話者に曖昧模糊としていない位置付けを与えるからである。(*Moi* 「私」とは異なるものとしての *Toi* 「君」)一言で言えば、対話者(*Toi* 「君」、*Tu* 「君が」)を起点として、私は架空の指標を越えて、対話者－共発話者 *coénonciateur* との関連において、話し手－発話者の位置付けを復活させるのである。そのことから、発話者が相手に取って代わるほどに、改めて相互関係の絶対的な支配者になることを示す「私の知っているあの君なら、君の様子を見れば、もし君が(…)飲むと私に言っても、私は驚かないだろう」のような注釈が生じる。ついでに言えば、 *Toi, tu as mal au cœur* 「君は胸がむかついている」についても同様である。同様に、懇願(あるいは確認)を表す疑問のような間主観的な *inter-subjectif* 操作が、何故正しく形成された発話文(*Tu boirais bien un verre de bière, non ?* 「コップ 1 杯のビールを飲むんじゃないのか?」のような類のもの。これは特有の韻律曲線を特色とし、場合によっては *non* 「違いますか」/ *oui* 「そうですか」が付け加わることもある)を修復するのも理解される。と言うのも、ここでは 2 つの操作が重ね合わされているのである。(1)あらかじめ構築されているもの<君はコップ 1 杯のビールを飲むのだが>の構築、(2)疑問による共発話者を起点とする新しい位置付けの関係の構築^{原注 31}、このことが、ここにおいてもまた、十全な実行を伴う対話者を復活させる。すると発話は再び容認可能になる、すなわち、発話の正しい形成の規則に合致したものとなる。ここで触れておくが、 *bien* の用法(開集合上の走査、照準を合わせられた境界越え)は、 *tu boirais bien (...)* *non ?* 「君は(…)を飲むんじゃないのか?」の疑問否定の用法に対応していることに注目しよう。この文は純粋な質問ではなく、肯定の答えを得ようとする疑問なのである。

これと似たような現象は *savoir* についても見出される。この問題はすでに A. ボリロと J.C. ミルネールによって部分的に取り上げられているが^{原注 32}、本論文の枠組みにおいて技術的な論証を提供しておくことは有益かもしれない。まず、次にいくつかの発話文を示そう。

- (18) (1) * *Je sais si Pierre est parti.* 「私は、ピエールはいったい出かけたのかを知っている。」
 (2) *Je sais bien si Pierre est parti, tout de même !* 「それでも、私はピエールが出かけたどうかはちゃんと知っているよ！」

(3) *Moi, je sais si Pierre est parti.* 「私は、ピエールが出かけたかどうか知っている。」

(4) *Bien sûr que je sais si Pierre est parti.* 「もちろん、私はピエールが出かけたかどうか知っている。」

(5) *Puisque je sais si Pierre est parti, tu ne devrais pas t'inquiéter.* 「私はピエールが出かけたかどうか知っているのだから、君が心配することはないよ。」(私が(…)知っていると言っているのだから、君自身が思っているように、私は(…)知っているのだから)

(6) *Rien qu'en te regardant écrire, je sais déjà si tu es sincère.* 「君が書いているのを見ると、それだけで君が誠実かどうか分かる。」

(7) *Je regarde les persiennes et je sais s'il y a quelqu'un.* 「私は罌戸を見れば、誰がいるかどうか分かる。」

発話文(1)が何故不可能になるのかは容易に理解できる。*Je* 「私」は $S_1 = \mathcal{S}_0$ の同一化を示し、*sais* 「知っている」(直説法現在)は $T_1 = \mathcal{S}_0$ の同一化を示し、*si* 「かどうか」は \langle Pierre 「ピエール」 *parti* 「出かけた」 \rangle という関係の可能な指示的価値の集合—すなわち、大まかに言えば(*parti* 「出かけた」, *pas parti* 「出かけていない」)—を走査することを示す。従って、発話者—話し手にとっては、*Je sais* 「私は知っている」と断言することと、それと同時に可能な価値の集合を走査し、それによって *Je ne sais pas* 「私は知らない」ことを示すことには矛盾が生じるのである。

(2)においては、現象はより複雑である。この発話文は、「ピエールは出かけていない」「君は何も知らない」「(…)かどうかは誰も知らない」などと言ったのかもしれない対話者に対するいらだった返事のように思える。(2)は文脈が道をつけたために可能になっているのだと言って済ませることも出来ようが、たとえ推論が、難儀な回り道を経て、メタファーが内に含んでいる直観を再び見出すことがあるとしても、メタファーが推論の代わりになることはあり得ない。これまでに述べたように、我々は *bien* が以下のような操作を示していると想定することにする。 e_2 を起点として、レクシス(ここでは、 \langle () *savoir si Pierre est parti* 「ピエールが出かけたかどうか知っている」 \rangle) が再構築される^{原注 33}。このレクシスは、 (p, p') の概念に帰着させることの出来る述部の関係である。*bien* は、開集合 p (可能な生起の集合) を走査するが、結局境界に到達することを示す。注釈は次のような解釈を与える。「ピエールが出かけたかどうか知ることについては、何を言っても、何をしても無駄だろう。いずれにせよ^{原注 34}、私はピエールが出かけたかどうか、確かに知っているのだ。」こうして、*tout de même* 「いずれにせよ」によって補強された *bien* のおかげで、*Sito* に対して位置付けされる、飽和していないレクシス \langle () *savoir si Pierre est parti* 「ピエールが出かけたかどうか知っている」 \rangle と、*je* 「私」すなわち $S_1 = \mathcal{S}_0$ が我々に、(話し手と同時に、)不安定な状態/*en suspens*/にある場所の割当操作 *instanciation* を提供する *je sais bien* (...) 「私は(…)確かに知っている」の間の関係が確立される。しかし、この構築を引き起こすのは対話者である。

(3)においても、類似した操作が確認される。*Moi, je sais* (...) 「私は、(…)知っている」は発話者に、話し手であると同時に、 \langle () *savoir si* 「()は…かどうか知っている」 \rangle に割り当てることの出来る価値の集合 K (すなわち、*moi* 「私」、*toi* 「君」、*lui* 「彼」など)の成員になることを可能にする。従って、発話主体 *sujet énonciateur* が発話文の主語 *sujet de l'énoncé* (集合 K の成員)から切り離

され、そのことによって、(1)で見られる矛盾を避けることが出来る。

(4)は上で述べたことから説明される。〈*je sais si Pierre est parti* 「私はピエールが出かけたかどうか知っている」〉はあらかじめ構築されているものであり、そこでは *je* は $S_1 = \delta_0$ 、すなわち $Sit_1 \in Sit_0$ という発話の位置付けの痕跡ではない。*je* は $S_1 = \delta_0$ という発話の指標を起点として計算される S_2 の価値を我々に提供するのである。言い換えれば、 $S_2 (= S_1 = \delta_0)$ は発話文の主語を提供するのであって、発話者を提供するのではない。発話(と対話 *inter-locution*)の位置付けについては、*Bien sûr que (...)* 「もちろん…」によって表されている。そのことが、 $(...)$ *je sais si (...)* 「(…)私は(…)かどうか知っている」を矛盾のないものになっている。従って、発話文(4)は正しく形成されている。

(5)は、*puisque* の存在が解釈をやや複雑にしているが、同じ種類のものである。従って、*puisque* は次のような形式の操作のマーカであることが思い出されるだろう。

$$\langle_2 \langle_1 \lambda_0 \in \langle_0 \text{Sit}_1 \rangle_1 \in \text{Sit}_0 \rangle_0 \rangle_2 \text{ 訳注 }^{12}$$

このことから 重ね合わされた発話の価値「私が(…)かどうか知っている(ことは一般に認められている／と言われていた／と私が君に言う／と君が言う)のだから」が生じる。従って、*je sais si (...)* 「私は(…)かどうか知っている」において、発話者と発話文の主語 *je* との分離が起こる。

(6)においても(7)においても、発話文が個別的な指示的価値を持つ場合であっても、全体的な指示的価値を持つ場合であっても、同じ図式を得る。指標の役割を果たす第1項 e_1 (*en te regardant écrire* 「君が書いているのを見ると」、*je regarde les persiennes* 「私は錠戸を見る」)が構築される。その時に、第2項 e_2 (*je sais si tu es sincère* 「私は君が誠実かどうか分かる」、*je sais s'il y a quelqu'un* 「私は誰かいるかどうか分かる」)によってレクシス間関係 *relation inter-lexis* が構築される。このように構築される関係は、相関関係(e_1 から私は e_2 を導き出す)であり、この関係は(6)では *rien que ... déjà* 「…すると、それだけで」によって示され、(7)ではアオリスティックな現在形と *et* 「そうしたら」という結合子によって示される。ここにおいてもまた、*je sais si (...)* 「私は…かどうか知っている」は基本的な位置付けの操作を示しているのではなく、その反対に、第1項に対して位置付けされているのである^{原注35}。

上で分析した全ての例において、*bien* 「よく」のみが可能であり、*fort bien* 「たいへんよく」は除外されることに気づかれたらう。*compter* 「…するつもりである」*croire* 「…だと思う」*espérer* 「…を期待する」*penser* 「…のことを考える」*vouloir* 「…したい」*devoir* 「…しなければならない」のようなモーダル的な述語、すなわち断定や照準の述語についても同様である。その反対に、*savoir* 「…することが出来る、…するすべを心得ている」と *pouvoir* 「…することが出来る」(これらの語には照準がない)については、状況はより複雑である。ある場合には、*bien* のみが可能であり(*ou peut-il bien être?* 「彼はいったいどこにいるのだろうか?」)、他の場合には *bien* と *fort bien* はほとんど交換可能であり(*il sait (fort) bien que je suis ici* 「彼は私がここにいることは(たいへん)よく知っている」)であり、また他の場合には *il peut bien se plaindre, je m'en moque!* 「あいつが泣き言を言うなら言えればいいさ、私はどうでもよい!」と *il peut fort bien porter plainte, vous savez* 「あの男は本当に告訴するかもしれないね」が区別されるだろう。そして最後に *fort bien* が義務的な場合があ

る。**il peut bien pleuvoir ce soir* 「今夜雨が降るかもしれない」 → *il peut fort bien pleuvoir ce soir* 「今夜雨が降ることは大いにあり得る」さらに、*il pourrait (fort) bien pleuvoir ce soir* 「今夜雨が降るだろう」、*il se peut / pourrait (fort) bien qu'il pleuve ce soir* 「今夜雨が降ることは(大いに)あり得る」。本論文では、紙幅が足りないというだけの理由で、これらの問題を完全に取り扱うことは出来ないが、読者は難なく推論を完全なものにすることが出来るだろう。それとは反対に、非常に研究の進んでいない韻律のマーカの領域に手をつけることを断念せざるを得なかったのは、我々の知識不足による。

ここで採用したアプローチは、言語学者が分類に基づく方法で満足してしまうことを、明確な形で拒絶していることを、読者は理解されたい(原注³⁶)。目標は一貫して、言語 *langues* の多様性を通じて言語活動 *langage* を把握し、そのために、問題を「提起し」、それに「推論に基づく」解答を与えることを可能にする表現のメタ言語的な体系を、体系的で丹念な観察に基づいて構築することなのである。このようにして、日常の発話文の一見どこにでもある形態を通じて、発話の作用の隠された操作を見出すことが期待出来るのである。

(おくだ ともき / 名古屋大学)

原注* 本論文は高等師範学校のセミナーにおいて、簡潔な形で発表された。現在の版は J.P. デクレの指摘から益を受けて、*Le Français Moderne* 46 (4), 1978 に掲載されたものである。

原注¹ 英語のタイトルは *They shoot horses, don't they?* 「彼らは馬を撃つ」であることを思い出そう。

原注² *pourquoi pas* 「...したっていいじゃないか」については、J. ミルネールの次の論文を参照すると有益であろう。Des hypothèses sur l'activité du locuteur. L'ambiguïté et la fonction de certaines questions en « Pourquoi ne pas » 「話し手の活動についての仮説 pourquoi ne pas を伴ういくつかの質問の曖昧さと機能」; *Journal de Psychologie*, n° 2 (1977), 227-242.

原注³ 「形式」*forme* という術語は、操作のマーカの「配置」を示すものであって、単なる形態論を示すものではない。

原注⁴ 以下に、図式化せざるを得ないが、論証の基礎を示す。レクシス λ_0 から、我々は大まかに2つのレクシス λ_1 と λ_2 を派生させる。これらは両者とも、状況的な指標でパラメータ付けされた装置上の計算によって、指示的な価値(アスペクト的、モーダル的、定量化 *quantification* / 定性化 *qualification*)を備えている。その装置の中では、 Sit_0 が原点となる指標、 Sit_1 が話し手の側の指標 *repère de locution*、などとなっている。パラメータは $S \ni S$ の範疇と $T \ni T$ の範疇に関するものである。位置づけの操作子 *opérateur* は $\underline{\equiv}$ であり、これは同一化 *identification* の価値と差異化 *différenciation* の価値と断絶 *rupture* の価値(それぞれ、 $=$ 、 \neq 、 ω と記される)を取り得る。 $\underline{\equiv}$ については、 $\underline{\equiv}$ と記される双対を有する。(これら全ての点について、私は専門的な文献を示す。) 我々は(あらかじめ構築された)指示的な価値を備えた派生されたレクシス λ_1 を e_1 と記し、 e_2 はひとたび λ_0 と e_1 に対して位置付けされれば、 λ_2 を意味する。 λ_0 は概念間の(原初的な)関係と、レクシスの図式と、述部の関係の構築と、述部の関係についての方向付けと、様々な限定の操作を結び付ける操作の所産である。方向付けされた全ての述部の関係は、出発点となる項 *terme de départ* を含む。方向付けされた述部の関係から発話文が構築される際には、それ自体が状況的な指標に対して直接的に位置付けされている、基本的な指標 *repère constitutif* が選ばれる。出発点となる項は、(最も単純な場合には)基本的な指標に対して位置付けされる。述部の関係はその前に構築された指標に対して位置付けされる。従って、交錯した構造が得られるが、以下にいくつかの経験的な例を示す。

(Sit) *(il y a) mon frère, il s'est acheté un appareil photo* 「私の兄は自分のためにカメラを買った」

(il y a) : 状況的な位置付けの痕跡 / *mon frère* : 基本的な指標 / *il* : 出発点となる項 / *s'est acheté un appareil photo* : 飽和されていない述部の関係

(Sit) *Nous la maîtresse, elle crie après les garçons à l'école* 「先生は学校で男の子たちをしっかりとつけている」

Nous : 第1の基本的な指標(状況的な位置付けの痕跡) / *la maîtresse* : 基本的な指標 / *elle* : 出発点となる項 / *crie après les garçons à l'école* : 飽和されていない述部の関係

当然ながら、基本的な指標と出発点となる項は、常に同一であるとは限らない。その上、指標の役割を果たすのが述部の関係である場合もある。さらに、基本的な指標のない発話文もあり得る。*Maman! Ilya un*

chat qui déchire les rideaux 「ママ、猫がカーテンを破っているよ」では、*chat* 「猫」と() *déchire les rideaux* 「カーテンを破る」が「一つのまとまりを成している」。同様に、*Quelqu'un a téléphoné* 「誰かから電話があった」では、基本的な指標は存在しない。おそらく気付かれただろうが、ここでは主題化や、アントン・マルティやそれに続く黒田などの「主語のない」発話文」といった問題が見出される。

基本的な指標はある特質を持っており、それは公理に基づく考察から導き出すことが出来る。(公理とは、長期にわたる微視的な観察の末に立てられるものである。) ここにおいてもまた、簡潔さを旨とするため記述の上でやや無理をしなければならないにしても、これらの特性の中から、我々は一つを取り出すことにする。基本的な指標は、それ自体が *Sit* に対して位置付けされているが、すでに同一化された項であり、この項によって新しい限定が構築されるのである。従って、基本的な指標は限定され(ここで、それが「既知のこと」や「旧情報」を示すのだと言って済ませるわけにはいかないだろう)、(発話者と話し手—この両者は必ずしも一致するとは限らない—に対する)状況的な位置付け(とその痕跡)を表しているのである。

それとは無関係な形で、*puisque* 「...だから」によって導かれる「従属節」が、 $e_1 \cong e_2$ の形式の定位 *localisation* の関係において、基本的な指標の位置付けを持つことを示すことが出来る。ここにおいて \cong は、指標になる側が左側に置かれ、位置付けされる側が右側に置かれることを示している。同様に、(状況的な位置付けを表す)基本的な指標が、両発話者あるいは発話者の一方の、異論のない発話上の価値を、多かれ少なかれ複雑な形で表していることを示すことが出来る。*tu lis bien des romans policiers* 「君だってちゃんと推理小説を読むんだ」は、*puisque tu lis des romans policiers* 「君だって推理小説を読むんだから」(「(...)は事実だ」「私は君が(...)する権利がある(と君が言う)ことを想定する)」という解釈を与える。*puisque... si...* 「...はこれほど...だから」の発話文、*puisque tu es si malin (que tu le dis / qu'on le dit)* 「君は(君が言うほどに/人々が言うほどに)抜け目ないのだから」と比べてみられたい。この発話文においては、*puisque* と *si* 「もし...なら」(*si tu es si malin* 「もし君がそれほどに抜け目ないのなら」)のみが可能で、*comme* 「...なので」や *quand* 「...するとき」は除外される。(**comme / quand tu es si malin* 「君がそれほど抜け目ないので/とき」) その説明は、*puisque*、*si*、*comme*、*quand* が示す操作の再構築の中に見出すことが出来る。最後になるが、2つの発話を一方を他方に対して位置付けする際には、随伴的か、継起的か、混成的(因果関係)のいずれかの関係を得ることを示すことが出来る。従って、 e_1 と e_2 の関係から、容易に $e_1 \cong e_2 \rightarrow$ *puisque* e_1 , *alors* e_2 「 e_1 なのだから e_2 」(*puisque tu lis des romans policiers, alors j'ai le droit de...* 「君だって推理小説を読むんだから、私にも...する権利がある」)か、結局は同じことになるが、 e_2 *puisque* e_1 「 e_1 なのだから e_2 」(*je me baignerai !, Tu te baignes bien !* 「私は水浴びをするよ!、君だってするんだから!」)が導き出される。

原注⁵ 必ずしも排他的ではない選択である。

原注⁶ 上記の全ての部分で用いられた術語(同値 *équivalence*、変調 *modulation*、生起 *occurrence*、近傍 *voisinage*)は明確な理論的位置付けを持っており、単なるメタファー的な近い意味の表現ではない。

原注⁷ 認知的と(前/メタ)言語的という術語の2つの意味においてそうである。我々は、この第1の側面を取り扱うだけの専門知識がないので、第2の側面のみに取り組むことにする。言語学者の全ての努力が向けられているのは、布置 *configurations*(話されたテキストや書かれたテキストにおけるマーカの配置)と操作の対応を確立することが出来るような、取扱い可能なメタ言語的表現の体系を構築することであろう。こうして、言語や論証現象の多様性を通じて、(一方では産出の、他方では理解の)発話行為を根拠付ける一般化可能な基本操作の集合を把握するために、制御された変形によって、形式的な操作のこの集合を構築することが期待される。

原注⁸ この点については、G. フレーゲほか各所にある *Begriff* 「概念」と *Gedenke* 「思想」に関する記述を読むと有益であろう。

原注⁹ ここでは抽象的な、すなわち表現可能で可能な生起を問題にしている。「表現可能」という語は、生起が理論的な位置づけを持つことを意味している。また「可能」という語は、ここで問題になっている過程が数学における数の構築に類似していることを示している。

原注¹⁰ これは、私が上で(α)の類の概念、あるいは述部の概念と呼んだものである。

原注¹¹ これらの例に加えて、概念に関するこれらの考察の原点は厳密に言語学的なものであることに注意を促したい。それは、日本語の「は」「が」という助詞、フランス語の *ilya* を伴う発話文、様々な言語における感嘆文、質問、否定の持つ曖昧さ(*il ne lit pas les romans policiers* 「彼は推理小説を読まない」)などである。

原注¹² 抽象的な生起の集合が問題になっていることを思い出そう。照準 *visée* については下を参照のこと。日常語で言えば、このことは、計画された行動を成功させるために、想定し得る努力の集合を構築することを意味する。メタ言語のレベルでは、領域はアスペクト的—モーダル的な次元のものであり、派生される位相空間は (c, c') であることが明らかになる。ここで触れておこうが、これは言語学的な補集合であることを忘れてはならない。(3b)においては、能動的な生起の集合を走査し、その走査の終わりに最終的な試みを行う。そのことから、こうした発話文がしばしば持つ覚めた色合い(「もしそれがうまくいけば」、「やむを得なければ」、「万策尽きて」)が生じるのである。

原注 13 *un bien* 「財産」と *un avoir* 「所有物」の関係についてよく考えてみると有益であろう。さらに、例えば、*Grammaire de l'hébreu vivant* 「現代ヘブライ語文法」D.コーエン、H.ザフラニ、パリ 1968、251-253 ページの中の、存在肯定の小辞 *yes* についての記述を読んでみるとよい。

原注 14 定位する側の表現 *localisateur* と定位される側の表現 *localisé* の間の抽象的な関係という意味において用いられている。

原注 15 *je le trouve bien mou* 「私は彼が確かに軟弱だと思う」については、この先の記述を参照のこと。*bien très mou* 「確かにとても軟弱な」については、形が整っていないので不可能である。というのも、*bien* 「確かに」が走査を示すのに対して、*très* 「とても」は境界に到達したことを示すのである。(紙幅の不足により、私はここで論証を示すことはしない。) ここで触れておくと、以下に示すのは、*bien* とある特定の価値に関する *valués* 走査という操作との共起可能性のいくつかの例である。－「比較級」*bien plus* 「より多く」、*bien trop* 「あまりに」、*bien assez* 「十分に」－「相対最上級」*il est bien le plus ignoble individu que j'aie jamais rencontré!* 「あの男はこれまでに会った中で最も下劣な人間だ！」

原注 16 従って、操作は／軟弱さ／の主観的な評価に関わるものである。ここで触れておくと、フランス語では、名詞形は／軟弱である／という概念の程度の空間(p, p')を指し示すことに注目したい。それは、*épaisseur* 「厚さ」が／厚い／という概念を指し示すのと同様である。名詞がゼロの価値も含めて全ての価値と共起可能なのはそのためである。*l'épaisseur de la couche est nulle, infime, infiniment grande* 「層の厚さはゼロである、ごく薄い、極めて厚い」反対に、断定された述語は反意的な区別を確立する。(la couche est épaisse 「層は厚い」は la couche n'est pas mince 「層は薄くない」を意味する。) こうして断定された価値 p から概念領域が再構築されることがあり、そのことから発話上の調整の操作が生じる。*la couche est épaisse* は「どちらかと言えば、あまりに」を意味することがあり得るし、*la couche est un peu épaisse* 「層は少し厚い」において *un peu* 「少し」は実際には *un peu trop* 「少し...すぎる」を意味している。ここで問題になっているのは、中国語学(反意語、比較の価値を持たないようにするために、「很」(「とても」)の後に置かれなければならない品質を表す述語の下位集合)や、ロシア語学(形容詞の短語尾形)や、ラテン語学(比較級の価値)などでよく知られた問題である。*bien* は *trop* 「あまりに」と等価になり得ることを付け加えておこう。*Votre rôti est bien cuit!* 「あなたのローストはよく焼いてあります」(解釈が曖昧)、*il fait bien froid pour sortir* 「出かけるには寒すぎる」

原注 17 *un peu* 「少し」は、理由をここで述べ立てるとあまりに長くなってしまふのだが、肯定的な方向性を持つのに対して、*peu* 「あまり...ない」は否定的であることが知られている。よく知られたこの事実によって、何故 *Je le trouve bien peu actif* 「私は彼が活動的ではないと思う」(ここで、我々は議論における意味上の便宜を図って、*mou* 「軟弱な」を *actif* 「活動的な」に置き替える)が *Je le trouve fort peu actif* 「私は彼が全く活動的ではないと思う」の意味にしかならず、*Je le trouve bien # peu actif, mais...* 「私は確かに彼が活動的ではないと思うが、...」の意味にはならないのかを理解することが出来る。例えば、*Je le trouve bien peu actif mais je le prendrai quand même* 「私は確かに彼が活動的ではないと思うが、それでもやはり彼を取るだろう」は *bien* と *peu* の間に間を入れると問題が生じる。

原注 18 読者はこの推論を私がフランス語の感嘆文について行った説明に関連付けられたかもしれない。つまり、私が教育上の理由によって *Langue française* 22 (1974), 6-15 の論文から切り離した論証の基礎が、上記の箇所に見出されるだろう。この推論は一般化可能であり、フランス語だけに適用されるものではないことを思い出していただきたい。

原注 19 このような解釈は、例えば例(8)や *il sera bien opéré le 24* 「彼の手術はちゃんと 24 日に行われるだろう」のような発話文では、必ずしも不可能ではない。ただ単に説明の便宜を図って、我々はこの可能な価値を考察しないこととし、*bien* が不可能ないくつかの発話文における *effectivement* 「実際に」の使用についても取り扱わないこととする。(この点については、この先の記述を参照のこと。)

原注 20 *visée* 「照準」は専門的な術語であり、志向性は全く含意していない。モーダル的な価値(例えば、「私は何も言いたくない」と等価の *je ne dirai rien* 「私は何も言うまい」)は、明示的な方法で構築されるだろう。

原注 21 こうして、例(7)においては、次のように注釈を加えることが可能であろう。「ある不確定な期間の間、(p, p')という生起の集合を走査する、すなわち、「彼は投函することを考えるかもしれないし、投函しようとするかもしれないし、投函することをためらうかもしれないし、しばらく投函することを忘れるかもしれない。いずれにしても、まだ投函していない。」いつか、彼は／投函していない／から／投函する／への境界を越え、投函が行われてしまえば、彼はそれを止め、この領域ではもう何も起こらなくなる。」意図的に素朴に語ったこの話は、厳密な方法で形式化することが出来る。

原注 22 日常的なメタファーを通じて、メタ言語的な構築を見出す以外にうまい方法がない。このことが意味するのは、ごく単純に、手紙を投函していない間は、それはまだ投函すべきものだが、それを投函してしまえば、もう投函という行為は存在しないということである。あるいは、手紙が投函されてしまえば、それは

もう「まだ投函すべき状態」にないということである。

原注 23 日常語をメタ言語的な目的で使用しようとするれば、それは必然的に重苦しいものになることに気付かれるであろう。そのために、メタ言語的な表現の体系をこしらえるのである。

原注 24 こうした現象は日本語でよく知られており、掘り下げた研究の対象となっている。

原注 25 Sit_0 は原点となる指標を表し、 Sit_1 は話し手の側の状況 *situation de locution* を表すことを思い出そう。

原注 26 S_2 (すなわち Tu) $\neq (S_1 = \delta_0)$ が所与のものとしてあり、そこから私は $S_2 \neq S_1$ と $S_2 \neq \delta_0$ を導き出す。ところで δ_0' (すなわち共発話者) $\neq \delta_0$ であり、そこから $S_2 = \delta_0$ を得る。このようにして、 S_2 は共発話者であり対話者になる。

原注 27 報道調と呼ばれる条件法については、この先の記述を参照のこと。我々はここで、自由間接話法または通常の間接話法 (*Il a dit qu'il viendrait à 5 h* 「彼は 5 時に来るだろうと言った」) *l'homme marchait, ému, dans quelques minutes il retrouvait son village* 「男は感動して歩いていた。数分後には自分の村が見つかるだろう」) や、語気緩和と呼ばれる条件法については議論しないこととする。この短い注意書きは推論を確立することのみを目的としているからである。

原注 28 紙幅の節約のため、我々は「確かに」の価値については取り扱わない。*Pierre repartirait bien dans la soirée* 「ピエールは夜のパーティーにもちろんまた出かけるだろう」未来形の場合には、この解釈は問題がないのに対して、条件法の場合には、いくつかの例外的な韻律上の注意が必要である。このことは、確認のための繰り返しの *bien* を *savoir* 「...することが出来る、...するすべを心得ている」や *pouvoir* 「...することが出来る」とともに用いることが出来ないことに関連付けられるだろう。(*il sait / peut effectivement le faire* 「彼は確かにそれを行うことが出来るだろう」は正しい文だが、同じ解釈で **il sait / peut bien le faire* は非文である。) 確認の価値は、あるいくつかのアスペクト的、モーダル的な条件がそろったときに、改めて不可避なものとなる。*il y aurait bien des bons du Trésor dans le coffre* 「金庫の中には確かに国庫証券があるそうだ」(「...そうだ」の類の条件法とともに)

この問題の解決は、細かい論証を除けば、かなり容易である。確認の *bien* は可能の集合上で操作を行う場合には問題となり、ただ一つの価値が断定されると容認可能となる。

原注 29 ここではレットルに過ぎない伝統的な名称を、我々は用い続けることにする。

原注 30 S_2 は *Jacques boire une bière* 「ジャック ビールを飲む」という関係の指標となる $Sit_2(S_2, T_2)$ の 1 つのパラメータであり、 ω は断絶の操作を示す。

原注 31 形式的な観点から見れば、質問するとは、(1) 発話者(δ_0)を起点として位置づけされる述部の関係を構築し、(2) $\delta_0' \neq \delta_0$ を起点とする第 2 の位置づけを構築することである。

原注 32 A. ボリヨ, *Remarques sur l'interrogation indirecte en français* 「フランス語の間接疑問についての注意書き」, p.23 in *Méthodes en grammaire française* 『フランス文法の方法論』, Klincksieck, 1976.

J.C. ミルネール, *L'amour de la langue* 『言語への愛』, pp.119-120, Seuil 1978.

原注 33 この論文をより読みやすくするために、私は形式化を可能な限り避けて、折衷的な表現を採用した。こうした解決策に難点があることは明らかである。

原注 34 このマーカーは見事なまでの意味的透明性を持っている。一方に *tout* 「まったく」があり、他方に *de même* 「同様に」があるからである。

原注 35 *si ... que ça* 「そんなに...」についても、類似した考察を行うことが出来よう。**il fait si chaud que ça* 「そんなに暑い」は不可能だが、*est-ce qu'il fait si chaud que ça?* 「そんなに暑いかい?」、*tu trouves qu'il fait si chaud que ça?* 「そんなに暑いと思うかい?」、*il ne fait pas si chaud que ça* 「そんなに暑くはない」、*puisqu'il fait si chaud que ça, va prendre une douche* 「こんなに暑いんだから、シャワーを浴びに行きなよ」は可能な形である。

原注 36 そのような方法では、周囲の文脈によって様々な *bien* があり得ることになる。例えば、疑問の *bien* (*où peut-il bien (= donc 「いったい」) être?* 「彼はいったいどこにいるんだ」)、確認の *bien* (*il est bien (= effectivement 「確かに」) ici* 「彼は確かにここにいる」)、断定の *bien* (*tu as bien (= vraiment 「本当に」) de la chance* 「君は本当についている」)、願望の *bien* (*j'irais bien (= volontiers 「喜んで」) en ville* 「私は喜んで町へ出ます」)、などである。